

大震災復興 三つのウェア

小口泰平

Yasuhei OGUCHI

これほど悲惨な震災を目の当たりにしたことはない
ことばを失い 時には思考停止状態に陥るほどであった
東北の地は 民話と絆の伝承 自然との共生
健気さ
こうした風土を秘めた精神世界を支える地であった
近年はものづくりの基盤と先進技術の産業地域として
静かに 国内はもとより国際的にも その道を拓き 培ってきた
東日本大震災の被害は人類史上の歴史に刻まれるほどに甚大であり
各種産業そして文化への影響は想像を絶するほどである
復興のための日々の生活 地域活動 産業活動を支える交通・物流の確保
さらには観光や旅の足の保証など
個人そして公共のモビリティの復興が待たれる
これらを支えるウェアは三つ
「ハードウェア」(Hard Wear)
「ソフトウェア」(Soft Wear)
「マインドウェア」(Mind Wear)であろう
その昔 安全は二の次ぎ 三の次ぎとされた時代があった
自動車の予防安全・衝突安全・事後安全が組み込まれはじめたのは
当学会が設立された1974年頃であった
当時は「ハードウェア」が主体であり やがて「ソフトウェア」が加わり
さらに今日の安全・安心のモビリティへとシフトしている
この安心は厄介ではあるがまさに「マインドウェア」のキーシューである
理想的なモビリティの追求にむけて
技術の規範はもとより
従来の枠組みを超越した学際性の大切さがクローズアップされている
特に大震災からの復旧を越えて
復興を目指す安全・安心の交通社会の創造には
様々な学問分野・学術分野がその領域を超えて
目的主導の英知の結集により
その意義と道筋と施策を見出すことが肝要である

英誌「エコノミスト」元編集長ビル・エモット氏はWEDGEのレポートで
「世界は日本の復興を敬意をもって見守っている」と結んでいる
誇りある日本として世界の善意に応えたい

(国際交通安全学会会長・芝浦工業大学名誉学長/原稿受理 2011年8月1日)